

小児でも直腸が脱出することがあります

直腸脱は内臓が下垂し肛門のしまりも悪くなり、いきむ習慣がひどい高齢者に生じることが多いと述べましたが、小児でも直腸が脱出してくることがあります。また小児の直腸脱は、幼児のため自覚症状が明確でなく、両親からの問診で疑い、怒責診断を行わなければ見逃されやすい疾患の一つでもあります。高齢者の直腸脱は直腸肛門を支える筋肉群の機能低下が関与しているのに対し、小児の直腸脱はこれらの筋肉群の解剖学的、生理学的脆弱性によるといわれており、成長とともにこれらの筋肉群が発達すれば自然寛解することが多いのも特徴です。しかし、常に排便に気をつけないといけなく、脱出した腸管を見ることも用手的に還納することもできない、保育園で脱出した時に困る、祖父母が困惑している、などにより保存的治療を継続することが困難で早期治療を望まれることが多いのも現状です。

上記の術式のうち高齢者で脱出腸管が長く、通常の経会陰アプローチでは修復困難で、開腹手術を行うには侵襲が大きくリスクが高い症例や再発例に対して行っています Altemeier 手術を呈示します。

小児直腸脱に対して種々の外科的治療法が報告されていますが、そのなかでも最も低侵襲で効果的であった硬化療法について紹介します。

表 I 小児直腸脱症例

症例	年齢 (歳)	性別	主訴	病歴期間	治療法	再発 (期間)
1	7	男	脱出、肛門出血	1年	パオスクレー	なし (4年)
2	4	男	脱出、便秘	4か月	パオスクレー	なし (2年5か月)
3	3	男	脱出、便秘	1年6か月	パオスクレー	なし (1年2か月)
4	6	男	脱出、便秘	3か月	パオスクレー	なし (8か月)

図1 小児の直腸脱



方法は全身麻酔下碎石位にて、直腸脱先進部をアリス鉗子で3か所把持し、5%phenol in almond oil(商品名パオスクレー)を1.5mlずつ3~4か所粘膜下に注入します。上記処置は1回のみで全例再発を認めていない。硬化療法は簡便で侵襲が少ないため、外科的治療を要する小児直腸脱の第一選択と考えるとよい方法と思われます。

(岩川和秀ほか:小児直腸脱に対する硬化療法 愛媛医学 25:62-65,2006)